日本声楽発声学会

学会通信

第１１号

会員の皆さまへ

理事長　米山文明

錦秋の候、会員の皆様にはご多忙にご活躍のこととお慶び申しあげます。

現執行部の任期も３年目に入り、あと半年を残すのみとなりました。皆様の暖かいご協力とお励ましをいただき、何とか大過なくここまでやってこられました。厚く御礼申しあげます。

学会活動もおかげ様でほぼ順調に歩んでまいりました。会員数もかなり増加しましたし、例会、研修会への参加人数も増え、活況を加えております。各部門の活動も、演奏部門は６月に末理事を中心としたご努力で、久しぶりに学会主催のコンサートが行われました。これにつきましては会員の方々からいろいろなご意見をいただきました。これらのご意見を参考に今後のコンサートのあり方を検討していく所存です。

学会４０年史も清水委員長と各編集委員のご尽力、先輩各位の甚大なるご援助により、ほぼ大詰めに近づいており、今期中に出版のめどは十分つきました。

また、規模がかなり拡大しました教育部門も全国各地から多くの熱心な会員の参加に援けられ、活動形もほぼ方向性が見えてきました。これまでの活動経過を近く小冊子にまとめて出版することになりました。そしてそれを軸に今後の実行体勢を具体的にどのように進めるべきかを次の全国集会で決定する予定です。

「教育」の問題は、３年５年で決着のつくものではありませんから、せめて幼・小・中学児童の教育体系の大綱づくりに少しでも寄与できればと願っております。これに関連して、まず日本のうたのあり方を検討し始めました。平成 17、18 年の夏の研修会で日本歌曲の公開レッスンを行い、伊藤京子先生、瀬山詠子先生にそれぞれお願いし、大きな成果がありました。今後いろいろな角度から日本歌曲を追求していく所存です。

また今年の夏の研修会から始めました「歌唱」入門の基礎となる「エチュード」（コールユーブンゲン、コンコーネその他）の研究も、ひとつの目玉として学会の若手理事の新鮮な知識とたくましい行動力に期待し、今後も続けたいと思います。幼少期から成人に向かう時期に、発声の基本をどのように植えつけていくべきかが大きな課題になるからです。

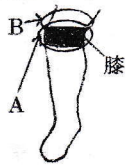
ほかにも難問山積みですが、できることから一つずつ解決していくしかありません。

これからも会員の皆様にいっそうのご指導とご鞭撻をお願いいたしますとともに、皆様のご健勝とご活躍を切に祈ります。

【Q&A】

〈声楽家も知っていてほしい解剖用語〉

学会での討論や研究発表のとき、人体の位置を示すことばが正しく使われていないことがしばしばあります。議論がかみ合わなかったり、誤解を与えて混乱することがありますので、これだけは守ってほしい基本的用語をいくつか示します。例えば、「手のひらを膝の上においてください」と言われたとき、手のひらをＡの部分におく人、Ｂの部分におく人がいます。この場合、正しいのはＢ、Ａは誤りです（これは膝の前面になります）。



以下、いくつか用語の意味を示します。

・前（腹側）、後（背側）
・正中（前後方向の中央線）……
・内側（正中に近い側）
　外側（正中に遠い側）

・上（頭に近い方）
　下（尾骨に近い方）
・近位（ある構造の起始部に近い）
　遠位（上記の逆）
・浅部（皮膚に近い）
　深部（上記の逆）
〔解剖学的平面〕
・矢状面（前後方向の垂直面）（縦面）
・前額面（矢状面に直交する垂直面）
・横断面（矢状面と前額面に直交する水平面）
・斜平面（矢状面、前額面、横断面のいずれでもない平面）

以下、次号。　(F. Y.)

……◆……◆……

学会員演奏会リヴュー

山田　実

3つのリサイタル

池田京子さん、川村英司さんが、それぞれ9月20日と24日に東京文化会館小ホールで、また10月15日に第一生命ホールで早瀬一洋さんがリサイタルをされた。池田さんは20世紀のアメリカ人作曲家3人による歌曲、川村さんが「詩人の恋」をメインとするハイネとシューマンの組合せ、そして早瀬さんが日本歌曲、イタリア歌曲とオペラ・アリアによる演奏会だった。

池田さんは文化庁芸術家海外派遣研修の成果を学会の5月例会でも報告されたが、今回のリサイタルは冒頭でナチスに追われて米国に移住したE.W.コルンゴルトがシェクスピアの詩につけた作品31の4曲を挿み、作品22全曲と38前半の3曲がドイツ語で、後半の2曲が英語で歌われた。休憩後は、自身、料理が得意だったといわれるL.バーンスタインがテキストも書いている「美味しい料理」の4曲。早口言葉のようにまくしたてるレシピがユーモアを混えて歌われ、最後にボルコムのキャバレーソングからの6曲で締め括られた。満員の聴衆は、美声とテクニックを駆使された歌唱芸術と花岡千春さんの珠玉の伴奏に酔い、至福の時を持った。

川村さんは没後150周年のシューマンの歌曲から、13年年長で同じ年に亡くなったハイネの詩につけたものばかりが選ばれた。「叙情間奏曲」より「蓮の花」に始まり、「若き悩み」より4曲、そして「詩人の恋」に最初は含まれていた4曲、休憩後は「詩人の恋」全16曲が歌われた。こちらは毎回のことながらドイツ語の原詩と日本語対訳が対照的に印刷されており、ドイツ語が苦手な筆者でも単語一つ一つの意味が容易に理解できた。また、プログラム末にはシューマンの自筆スケッチ、楽譜、さらに初版、改訂版との比較など、氏の研究成果が4ページにわたって記され、音楽会には開場と同時に入場し、あらかじめプログラムに目を通しておけばもっと演奏を興味深く聴くことができることが示唆された。伴奏は名手小林道夫さんが至高の芸術を披露され、快い響きの歌声とともに非常にレベルの高いコンサートであったにも関わらず、聴衆がやや少なめであったのが残念でならない。

早瀬さんは、ご自身もプログラムで述べておられるように、テノールの高音の魅力を十二分に発揮できる選曲で、2階席の両端を除いてほぼ満席の聴衆は、67歳というお年を全く感じさせない響き豊かな高音で朗々と歌われた1曲々々に拍手を惜しまなかった。アンコールでは、カンツォーネ2曲と「嫁ぐ娘への子守歌」を歌われたが、お嬢様を持たれるお父上の愛情が切々と感じられ、涙を禁じえず、アンコール最終曲のO sole mioは、伴奏者鳥井俊之さんの、おそらく即興と思えるすばらしい伴奏が有終の美に花を添えた。

ヨーロッパ　響きの花束

―米山文明・マリア ヘラー「呼吸と発声」研究交流２０周年記念演奏会―

川上勝功

去る１０月１１日、けやきホールで催された演奏会は、イタリア出身のL.フィオレンツァ、ドイツ出身のM.シュッペ、それにM.ヘラーの三女史

による、それぞれの持ち味が十分に披露された「歌曲と即興演奏」の夕べであった。

その演奏内容は、ある種度肝を抜かれた感があった。出演の三女史は、ともにヨーロッパで歌手として活躍していると紹介されていたが、フィオレンツァ、シュッペのお二方は、現代曲をレパートリーとしているようで、二重唱では即興演奏を聴かせてくれた。二人とも人間の声のあらゆる可能性を追求した、つまり声として出せる何十種類もの音色を使って、息の合った即興演奏を聴かせてくれたのである。私はかねてより、声の柔軟性を得るためにも、さまざまな音色のトレーニングをすべきとの考えを持っていたが、それが目前でいとも簡単に（というと語弊があるかもしれないが）披露されたことに大きな驚きを持ったのである。

合唱の世界では、欧米の現代作曲家によって、モンゴルのホーミーや、自然界の音の擬音的な音声を声で表現するという技法は既に数多くあって、私もカナダの作曲家マリー・シェーファーの「スノーフォームズ」を女声合唱で演奏したことがある。同じように興味を持ち、研究している方もいらっしゃるのではないかと思う。

短い文章に当夜の詳細を伝えることは不可能だが、願わくば、この夜の演奏会をぜひ発声学会の例会でも取り上げ、学会員の皆さんにも触れていただきたいと強く願ったしだいである。

〔海外だより〕

パリ便り―二つのオペラ―

佐野友紀

パリはいつでも話題が多い。長い歴史と伝統の上に芸術のみならず、政治経済もヨーロッパの中心として今日を生きているからであろう。パリジャンは「三人寄れば文殊の知恵」ならぬ３人寄れば議論沸騰という人達でもあるから。

２００５年後半から今年前半のシーズンも多種多様のオペラ、コンサートがあり、昨１２月にはゲルギエフ率いるマリンスキー劇場が「ボリス・ゴドノフ」を市立劇場で公演した。若手歌手を中心に演出、舞台制作にも若手を起用し、ムソルグスキーのオリジナル版による幕なしの２時間、「近代のボリスを一幕を通してパリの人々のお目にかける」とゲルギエフの胸を張ったコメントがあった。明るいブルー、赤、白の色彩感溢れる抽象的な舞台、男性歌手たちの充実した声（女性は貧弱であったが）、しかし、そこからは１７、８世紀初頭の皇帝と民衆の激しい抗争は伝わらず、スターリン時代に重ねて見せようと意図したにせよ、中途半端でどこかミュージカルをさえ思わせる舞台であった。

それに２月オペラ座で上演された「ドン・ジョヴァンニ」は、現代に舞台を移し、場所はパリ近郊にミッテラン大統領最後期に造られた高層ビルの街デファンス。ドン・ジョヴァンニはそのビル内の企業経営者、レポレロはその秘書。社長室、秘書室、エレベーター、中庭に面した向こうに高層ビル群が見え、主人公たちはスーツにネクタイ、女性たちも上質な現代の衣装、農民たちはこのガラスの高層ビルを磨く特殊清掃人という設定。その舞台上にドン・ジョヴァンニの自由奔放、幼児性、残虐性をモーツァルトのオペラ・ジョコーソに乗せて歌い演じられる。タイトル・ロールのマッテイ―北欧の長身の若きバリトン―は、声の柔軟性を駆使し多様な表現、レポレロのピサローニの巧みなレチタティーヴォ、シェーファーの透明な響きのドンナ・アンナ、この役は比較的重いソプラノが歌う場合が多いが、シェーファーは、そのテクニックと高い音楽性で絶賛を博した。

この徹底した現代化はスキャンダル（ここでは大騒ぎくらいの意）を呼び、一斉に取り上げた新聞でも賛否両論激しく、賛成派は「今、時代考証をしたオペラ上演するなどオペラを博物館入りさせるもの。普遍的なテーマを持って現代の聴衆にどう訴えるかが問われなければならない。しかし、パリジャンは嫌いだろうが」という具合。私が観た夜は時折失笑を買うなどはしたが、幕が降りる

と同時にブラヴォーと大喝采であった。こうした徹底した現代化の舞台は、オペラへの親近感を聴衆に持たせるのではなかろうか。もちろん歌い手たちの質の高さあってのことであるが。

また、今年1月、4夜に亘り行われたアンネ・ゾフィー・フォン・オッターのコンサートについても記したいのだが、紙数の関係で次回に譲ることにしたい。

◎第5回教育部会開催のご案内

1、と　き　平成18年11月25日（土）
10:30～16:00

2、ところ　東京文化会館4階中会議室
JR上野駅公園口前

3、プログラム

A　10:30～12:00　音声生理学講座
講師　米山文明（米山耳鼻咽喉科院長・本学会理事長）
テーマ　声とことばの発達―その4

B　13:00～14:00
「教育部門委員会」からの報告と提案
過去30回にわたり開催した教育部門委員会・研究会・全体会を踏まえての総括と展望

C　14:00～16:00
グループ別ディスカッションとまとめ

4　会費　2,000円（11月20日まで郵便振替で。口座00170-0-119920　日本声楽発声学会）

5　申込方法　郵便振替用紙の通信欄に「教育部会参加費」と明記してください（必ず事前申込みのこと）。

〔会員だより〕

◆演奏会◆

◇　第34回ファカルティコンサート
11月16日（木）午後6時30分開演
日本大学カザルスホール　入場無料
三つの歌（二重唱）丹羽勝海作詞・作曲
むこうに輝く光が　月に寄す
砂のステップ　他
出演：三垣理英子(S) 丹羽勝海(T)　P. 松井晶子

◇　NAOコーラスグループ第7回演奏会
12月24日(日)14時開演　新宿文化センター
第2部　バッハ クリスマス オラトリオ
指揮：大谷研二　合唱指揮：近藤直子（会員）
出演：高橋節子(S) 五郎部俊朗(T)　他
入場料：4000円(S) 3000円(A) 2000円(自由席)
連絡先　FAX. 03-3897-7160

◆CD発売◆

◇　N響創立80周年記念
「N響伝説のライブ」続編 CD
ベートーヴェン：交響曲第9番合唱付
ロヴロ・フォン・マタチッチ指揮
NHK交響楽団
中沢　桂(S) 春日成子(A) 丹羽勝海(T)
岡村喬生(B)　国立音楽大学合唱団
（1973年12月19日 NHKホールライブ）
11月22日発売予定（キング）　2,500円

●前10号4ページのコーネリウス・リード著、移川澄也監修「音楽用語辞典」は「声楽用語辞典」の誤りでした。お詫びし訂正をいたします。

〔事務局より〕

◎平成19年第85回例会(5月)の研究発表を募集いたします。締切は11月末日です。学会誌35号、学会通信への投稿もお待ちしております。演奏会、出版、CD制作等近況についても、どうぞ事務局までお寄せください。また、ホームページに関するご意見、ご要望も「広報委員会」あてによろしくどうぞ。

事務局長 川上勝功

学会通信　第11号　平成18年10月25日
日本声楽発声学会事務局
〒275-0005 習志野市新栄2－9－2　西村暁子方
TEL./FAX. 047-479-5701